

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

山梨正明編『認知言語学論考』No.15

本書は認知言語学の先端を開く論文を継続的に掲載するシリーズの第15巻である。本シリーズにおいても多様な角度から論じるものが並ぶ。

本書の構成は次のとおりである。冒頭の「認知言語学の出現の背景と言語研究の新たな展望——生成意味論のレガシーとその発展的継承——(山梨正明)」では、今後の学際的な言語学の進展のための課題が述べられる。それに続き、「身体投射——私たちはなぜ対象物に身体モデルを用いるのか——(沖本正憲)」、「《指示》の文法を考える——ジャンプ動作実験の結果に関する言語学的検討——(深田智)」、「命令・禁止表現から接続表現へ——日中語における(間)主観化とテキスト機能の発達——(朱冰・堀江薫)」、「逆接「～ながら」の周辺事例の解釈——付帯状況用法との意味的関わり——(梶川克哉)」、「相互行為における指示の構造と指示表現の選択(平田未季・山本真理)」、「商標言語学の試み——類否判断における認知言語学的考察——(五所万実)」、「時間の流れに関する認知言語学的考察(吉本一)」、「身体部位詞のメトニミーの意味拡張に関する考察——イメージ・スキーマの観点から——(李旖旎)」、「特定のインスタンスに成立するメトニミーの理解過程について(伊藤薫)」。(椎名渉子)

(2021年5月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 318頁 定価10,780円 ISBN 978-4-8234-1029-1)

佐藤武義編『古代の語彙——大陸人・貴族の時代——』

本書は「シリーズ〈日本語の語彙〉」の第2巻にあたる。「古代」とは『日本書紀』編纂時期から『古本説話集』の成立頃までの約500年間を指し、大陸から伝来した音声言語(漢字)が音声言語(和語)と出会い、日本語の原型が形成される様子を跡付ける。

本書は全3部12編の論文からなる。「第1部 大陸人の育んだ語彙」に「第1章 『日本書紀』の語彙(浅野敏彦)」「第2章 風土記の語彙(兼岡理恵)」「第3章 音義書の語彙(池田証寿)」「第4章 古辞書の語彙(藤本灯)」。「第2部 自立した古代人の語彙」に「第5章 『古今和歌集』の語彙(安本真弓)」「第6章 『枕草子』の語彙(百留康晴)」「第7章 『源氏物語』の語彙(大木一夫)」「第8章 『栄花物語』の語彙(藤原浩史)」。「第3部 拡大する日本語表現」に「第9章 『日本霊異記』の語彙(ジスク マシュー)」「第10章 『御堂閔白記』の語彙(後藤英次)」「第11章 『今昔物語集』の語彙——動詞から見ると和漢混濁文の特徴語——(藤井俊博)」「第12章 『古本説話集』の語彙(勝田耕起)」を収める。巻末に「執筆者紹介」「索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年7月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 174頁 定価4,070円 ISBN 978-4-254-51662-3)

米川明彦著『俗語百科事典』

本書は著者の長年の俗語研究成果を整理し、事典のかたちにとまとめあげた書である。意味分野、媒体、造語法といった俗語を切り取る視点別に12部から成る。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」に続き、「第一部 俗語とは何か」では学術的な定義を述べている。「第二部 意味分野から見た俗語」では、意味分野を22のカテゴリーに分けて俗語を示す。「第三部 媒体から見た俗語」では、10の媒体から生まれた俗語を取り上げる。「第四部 造語法から見た俗語」、「第五部 集団から見た俗語」に続き「第六部 口頭語形の俗語」ではもとの語の音的加工という観点から俗語を捉える。「第七部 文献から見た俗語」には、国会図書館にも所蔵されていない『性的隠語集成 第二版』（1923年）の紹介もある。「第八部 俗語の語源・造語者」に続き、「第九部 集団語から一般語になった俗語」ではある特定の集団語から一般語になったものを20の集団別に示している。「第一〇部 消えた俗語」、「第一一部 年別 新語・流行語一覧（解説付き）」、「第一二部 質問に答える」と続き、「読者のための参考書——俗語に関する著書——」も付されている。巻末には「語彙索引」「人名索引」「書名索引」「事項索引」がつく。（椎名渉子）

（2021年7月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦二段組み 342頁 定価4,950円 ISBN 978-4-254-51068-3 C3581）

金智賢著『コピュラとコピュラ文の日韓対照研究』

本書は、現代日本語と韓国語コピュラ形式「だ」と「ita」とコピュラ文を取り上げ、両言語の特徴を明らかにする対照研究である。コピュラ文の研究は日本語と韓国語でそれぞれ研究の蓄積があるが、本書で行っている対照分析は未開拓の領域である。対照することによりこれまで見えてこなかった面が明らかになっている点が興味深い。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第183巻として刊行された。

構成は次のとおりである。「はしがき」に続き、「第1章 韓国語コピュラ文の意味論——西山（2003a）による基本型コピュラ文の日韓対照——」、「第2章 一項名詞文から見る「だ」と「이다 ita」の意味機能」、「第3章 ウナギ文の日韓対照」、「第4章 動作性名詞述語文とコピュラ」、「第5章 日韓の拡張型コピュラ文」、「第6章 分裂文から見る日韓コピュラの特徴——述語前置型分裂文の分析を兼ねて——」、「第7章 「AはBだ」から「BのA」へ——いわゆる属格助詞の日韓対照を兼ねて——」、「第8章 結論」。巻末に「引用文献」と「索引」を付す。（椎名渉子）

（2021年7月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 240頁 定価8,030円 ISBN 978-4-8234-1066-6）

服部匡著『服部匡日本語論考選集』

本書は、故服部匡氏の主要な論文を編者の田野村忠温氏が選び、一書に編まれたもの

である。著者の幅広い関心が反映されており、いくつかに分けられて多様な論文が収められている。本書は、和泉研究叢書 539 巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「序」に続き、「音韻と意味」には、「動詞のアクセント変化における意味特性の関与について」。「終助詞」には、「汎性語の終助詞ワについて」「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」「終助詞ネに関する二三の観察——落語を音声資料として——」「終助詞の音調について——落語資料を中心に——」。「否定・疑問」には、「現代語における「～か」のある種の用法について」「現代語における「～か」のある種の用法について（補遺）」「非標準的な形の出現傾向と話者の意識について——「めったにしか（～ない）」「ろくにしか（～ない）」という言い方——」「全くと「全然」の使用傾向の変遷——国会会議録のデータより——」。「尺度性・相対性」には、「アマリ～ナイとサホド（ソレホド）～ナイ」「大して（～ない）」「大した」について」「副詞「なかなか」の意味用法の分析」「～どころか、～どころで（は）ない」とその周辺の諸表現——あわせて、「～ばかりか、～はおろか」等との比較——」「ダケ・バカリについて——ガ、シカとの共起——」「程度副詞と比較基準——「多少」「少し」を中心に——」「多寡を表す述語の特性について——肯定／否定関係との平行性を中心に——」「小さな量を表わす表現の意味的性質について」「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係——通時的研究——」「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移——国会会議録のデータから——」「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移（2）——国会会議録のデータから——」「名詞と尺度的形容詞類の共起類度の推移——国会会議録のデータから——」「可能性」の語史の一側面——その度合の表現の歴史——」「漢語動名詞＋‘先’」の意味分析——新聞コーパスの実例に基づく多義の研究——」。「文体」には、「「～シテイル」と「～シテオル」——戦後の国会会議録における使用傾向調査——」「複合格助詞関連形式での丁寧形／普通形の対応関係——コーパスに基づいた研究——」「「～てございます」の使用傾向の推移——「～てある」「～ている」との対応関係に注目して——」「話者の出生年代と発話時期に基づく言語変化の研究——国会会議録を利用して——」。巻末に「著述目録」と「跋に代えて（編者 田野村忠温）」を付す。（椎名渉子）

（2021年7月31日発行 和泉書院刊 A5判横組み 512頁 定価14,300円 ISBN 978-4-7576-1005-7）

国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 40』

本書は、国語語彙史に関わる研究を中心に、その体系化や新たな方法論、隣接分野と語彙史との関わりなどに取り組んだ論文14編からなる論文集である。

巻頭の「『国語語彙史の研究』四十の発行に際して（佐藤貴裕）」に続き、本書の構成は次のとおりである。「平安仮名文学と形容詞——歌を核とする物語から作り物語へ——（中川正美）」「古典語における形容詞テ形節の副詞的用法の変遷（菊池その美）」「平安時代から大正時代にかけての形容詞の活用形分布とその周辺（村田菜穂子・前川武）」「接尾辞ガルの伴う動詞（蜂矢真郷）」「将門の笑い声——『平治物語』の「しひとぞ笑ひける」、あるいは中世の

舌打ち行動について——(山田昇平)」「[「本(ほん)」の連濁における史的変遷(呂建輝)」「[「御訪れ」と「慰み」——『コンテムツス・ムンデ』の翻訳方法——(鈴木広光)」「[『日葡辞書』における動物に関する記述——馬を中心に——(岸本恵実)」「[「化石」の成立と展開(田野村忠温)」「[「航米目録」の漢語語彙について——「～然」を手がかりに——(浅野敏彦)」「[明治・大正期における否定の字音接頭辞——「非」を中心に——(小椋秀樹)」「[「言海」における類義語見出しが漢語の場合(今野真二)」「[全国視野での意志・推量助動詞類の分布と歴史(再考)(彦坂佳宣)」「[長野まゆみ『お菓子手帖』の“ことば”観(前田富祺)。巻末に「語彙索引」「人名・書名・事項索引」「『国語語彙史の研究』第一～四十集総目次」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年8月15日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 329頁 定価9,350円 ISBN 978-4-7576-1006-4)

丸山裕美子・武倩編著『本草和名 影印・翻刻と研究』

本書は『本草和名』の写本の中でも最善本の一とされる西尾市岩瀬文庫所蔵本を影印・翻刻し、日本古典全集本の誤りを正すことで、より信頼できる『本草和名』の新たなテキストを提示する。そして『本草和名』の持つ歴史的意義と国語学的意義を明らかにすることを旨とするものである。

本書の構成は次のとおりである。「第Ⅰ部 影印」、「第Ⅱ部 翻刻」、「第Ⅲ部 研究」(「第Ⅰ章 敦煌写本本草書と古代日本の本草書——『本草和名』の歴史的意義——」「第Ⅱ章 『本草和名』の諸本」「第Ⅲ章 『本草和名』と『倭名類聚抄』)、 「第Ⅳ部 補論」(「第Ⅰ章 延喜典薬式「諸国年料雑業制」の成立と『出雲国風土記』」「第Ⅱ章 北宋天聖令による唐日医疾令の復原試案」「第Ⅲ章 唐医疾令断簡(大谷三三一七)の発見と日本医疾令——劉子凡「大谷文書唐《医疾令》・《喪葬令》残片研究」を受けて——)、 「第Ⅴ部 索引」。巻末に「あとがき(付・担当、初出一覧)」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年8月30日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 605頁 定価14,300円 ISBN 978-4-7629-4239-6)

沖森卓也編『日本語文法百科』

本書は、日本語や日本語教育に興味を持つ人が手に取ることを企図して編まれた、文法の入門書である。学校文法を入り口としつつ、学校文法以外の観点からも日本語の言語的事実を説き、日本語文法の総合的概説書であることをめざしている。

本書は全4部からなる。構成は次のとおりである。「第Ⅰ部 総説」(「第Ⅰ章 文法と文法理論(沖森卓也)」「第Ⅱ章 文法的単位(金子彰)」)、「第Ⅱ部 語と品詞」(「第Ⅰ章 品詞(佐々木文彦)」「第Ⅱ章 体言(佐々木文彦)」「第Ⅲ章 名詞(小林伊智郎)」「第Ⅳ章 代名詞(小林伊智郎)」「第Ⅴ章 用言(佐々木文彦)」「第Ⅵ章 動詞(宮田公治)」「第Ⅶ章 形容詞(吉田光浩)」「第Ⅷ章 形容動詞(吉田光浩)」「第Ⅷ章 副詞(戸村佳代)」「第Ⅹ章 連体詞(土井光祐)」「第Ⅺ章 接続詞(沖森卓也)」「第Ⅻ章 感動詞(木村義之)」「第Ⅼ章

助動詞(山口豊)」「第14章 助詞(野村貴郎)」「第15章 付属語の意味範疇(徳本文)」「第16章 接辞(山本真吾・木村一)」、「第3部 文のしくみ」(「第1章 文のなりたち(阿久津智)」「第2章 態とその周辺(小林典子・山田敏弘)」「第3章 アスペクトとテンス(平井吾門・町田互)」「第4章 モダリティ(井上優)」「第5章 表現と助詞(丹羽哲也・山田昌裕・岡田薫)」「第6章 従属節(川端芳子・太田陽子)」「第7章 複合辞(大場美穂子)」、「第4部 文法のひろがり」(「第1章 待遇表現(木村一・高澤信子)」「第2章 談話と文法(井島正博)」「第3章 文法の視点(平山紫帆・栗田奈美・岡照晃)」「第4章 文法研究史(常盤智子・服部隆)」「第5章 文法の変遷(山本真吾・木村義之)」「第6章 日本語教育と日本語文法(砂川有里子)」。巻末に「索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年9月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 546頁 定価13,200円 ISBN 978-4-254-51066-9)

尹盛熙著『ことばの「省略」とは何か』

本書は、話の中ですでに出たことや、話の流れ上、言わなくてもお互い分かっていることなどをあえて言わないというような、誰もがやっている言語現象である「省略」を取り上げたものである。ことばの運用において省略という戦略をどう活用しているかに焦点をあて、日本語・韓国語によって異なる特徴などに触れながら、省略の言語変化における意味に迫る。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」に続き、「第1章 省略に対する基本的な考え方」には、「第2章 日本語の様々な省略——何を省くか——」「第3章 日本語のテキストと省略——どこで省くか——」「第4章 他言語との比較——韓国語は何をどこで省くか——」「第5章 ことばの変化を促す省略——省いたらどうなるか——」「第6章 結論——省くか、語るか——」巻末に「付録 英米ドラマのエピソード別集計」「あとがき」「参考文献」を付す。(椎名渉子)

(2021年9月10日発行 大修館書店社刊 A5判横組み 234頁 定価2,750円 ISBN 978-4-46921-386-7)

服部紀子著『「格」の日本語学史的な研究——江戸期蘭文典と国学からの影響——』

本書は蘭文典『六格前篇』と『和蘭語法解』に焦点をあて、オランダ語を通して日本語の格がどのように理解されたのかを考察し、それが鶴峯茂申『語学新書』における日本語の格の記述に対してどのような影響を与えたのかを跡付けるものである。日本語学会論文賞叢書の第1冊目として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「序章」「第1章 蘭文典における格理解Ⅰ——『六格前篇』におけるオランダ語の格——」「第2章 蘭文典における格理解Ⅱ——『和蘭語法解』におけるオランダ語の格——」「第3章 蘭文典に見る日本語の「格」——『六格前篇』と『和蘭語法解』とを比較して——」「第4章 『語学新書』における格理解Ⅰ——蘭文典の格をどのように取り入れたか——」「第5章 『語学新書』における格理解Ⅱ——国学の言語研究をどのように取り入れたか——」「第6

章 山田孝雄『日本文法論』における「位格」「終章」。巻末に「使用テキスト」「参考文献」「附録（吉雄俊蔵『六格前篇』稿本）の影印」「後記」「索引」を付す。

なお本書は、2018年に聖心女子大学に提出された博士論文「格の日本語学史的研究——江戸期蘭文典から鶴峯戊申『語学新書』へ——」に加筆・修正を加えたものである。（遠藤佳那子）

（2021年9月17日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 192頁 定価8,800円 ISBN 978-4-8386-0759-4）

林由華・衣畑智秀・木部暢子編『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』

「日琉諸語」とは、日本語、琉球諸語、八丈語からなる言語群を指す。本書はそれら日琉諸語に関する記述言語学的・歴史言語学的な関心をもとに編成された論文集である。

本書は全3部からなり、10編の論文を収録する。「第I部 系統を考える」に「第1章 日琉諸語の系統分類と分岐について（ペラルル、トマ）」「第2章 分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み（五十嵐陽介）」「第3章 「日本語について」と『日本語の再建』——その継承と発展のために——（平子達也）」、「第II部 系統研究の可能性」に「第4章 DNAと言語をつなぐ（斎藤成也）」「第5章 琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性（狩俣繁久・和智仲是・木村亮介）」「第6章 方言群の時空間動態の統計的モデル化に向けての予備的考察（村脇有吾）」、「第III部 諸方言から歴史変化へ」に「第7章 琉球諸語と上代日本語からみた祖語の指示体系試論（衣畑智秀）」「第8章 方言研究から歴史変化を、歴史変化から方言解明へ（ローレンス、ウエイン）」「第9章 不規則性の衰退——日本語方言の動詞形態法で起きていること——（佐々木冠）」「第10章 八丈語の古層（金田章宏）」以上から構成される。巻末に「索引」「執筆者紹介」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年9月28日発行 開拓社刊 A5判横組み 296頁 定価4,400円 ISBN 978-4-7589-2354-5）

小田勝著『百人一首で文法談義』

本書は特に語学の観点から百人一首歌の解釈を行った解説書である。古注釈の説を整理して示したうえで、最新の古典文法研究の知見を反映した著者の解を示す。和歌本文の示し方にも工夫があり、たとえば「わたの原、八十島かけて漕ぎ出でぬ」と、人には告げよ。海人の釣り舟。」のように、和歌の構造を明らかにするため句読点を付し、引用句をカギ括弧で囲んである。百人一首歌を糸口として古典文法に説き及ぶ一面もあり、著者による『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院）とあわせて古典文法の理解を深めるテキストにもなろう。巻末に「あとがき」「索引（初句・事項・引用文献著者名）」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年9月30日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 294頁 定価3,300円 ISBN 978-4-7576-1009-5）

角田太作著『日本語の地殻変動——ラレル・テアル・サセルの文法変化——』

本書は、著者が「ラレル受動文」「テアル受動文」「サセル使役文」とする文を取り上げ、現代日本語に起きている文法変化について考察するものである。また文法変化だけでなく意味の面でも変化が起きているとし、その例として動詞「楽しむ」について考察する。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」「第1章 ラレル受動文（第1部）：その使用の実態」「第2章 ラレル受動文（第2部）：なぜ、ラレル受動文を使うか？」「第3章 ラレル受動文（第3部）：文法の変化」「第4章 テアル受動文」「第5章 サセル文：使役文（第1部）：作り方と意味」「第6章 サセル文：使役文（第2部）：変化」「第7章 「楽しむ」：意味の変化の例」「第8章 本書のまとめ」。巻末に「参考文献」「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年9月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 270頁 定価3,520円 ISBN 978-4-87424-868-3）

上野和昭著『名目鈔声点本の研究』

本書は、声点が差された名目鈔伝本について、その声点の表す音調を研究し、中世以降に四声観が変容するなかに名目鈔の声点を位置づけようとするものである。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」「凡例」「第1章 名目鈔とその伝本」（「第1節 名目鈔の著者自筆本」「第2節 名目鈔諸本の系統」）、「第2章 名目鈔の声点本」（「第1節 名目鈔声点本研究の経緯と現状」「第2節 中院通秀の声点を伝える諸本」「第3節 尊海識語本の声点と後水尾院点」「第4節 多和文庫本」「第5節 平松文庫本」「第6節 神原文庫本」「第7節 増補系諸本」）、「第3章 名目鈔に差された声点とアクセント」（「第1節 名目鈔に差された声点によるアクセント史研究の現状」「第2節 和語に差された声点とアクセント」「第3節 三拍以下の漢語に差された声点とアクセント」「第4節 四拍の漢語に差された声点とアクセント」「第5節 名目鈔の四声観」）。

巻末に「参考文献」「本書と既発表論文との関係」「あとがき」「附録」（「東山御文庫本（著者自筆本）翻刻」「名目鈔「第三群」六本対照 声点付語彙索引」）「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年10月8日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 432頁 定価13,200円 ISBN 978-4-8386-0760-0）

榎山洋介著『[例解] 日本語の多義語研究——認知言語学の視点から——』

本書は現代日本語の多義語を考察対象とし、共時的な視点からの方法論がまとめられている。何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定、プロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係の明示、複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明について、言語事実の提示を重視する立場から取り組む。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」に続き、「第1章 多義語をめぐる諸問

題」には「多義語とは」「多義語・同音異義語と漢字表記」「多義語分析の課題」「単義説の問題点」。「第2章 多義語の多様性：多義的別義の自立性と関連性」には「典型的な多義語」「単義語寄りの多義語」「同音異義語寄りの多義語」「多義語動詞と格体制」。「第3章 プロトタイプの意味の認定」には「多義語のプロトタイプの意味とは」「先行研究の検討」「動詞・名詞・形容詞のプロトタイプの意味の認定」。「第4章 比喩から多義語へ：複数の意味の関連性」には「多義語の発生・成立」「複数の意味の関連性」「三種の比喩の関係」。「第5章 放射状ネットワークモデルに基づく多義語の分析」には「放射状ネットワークモデルとは」「放射状ネットワークモデルに基づく分析」。「第6章 スキーマティック・ネットワークモデルに基づく多義語の分析」には「スキーマティック・ネットワークモデルとは」「スキーマティック・ネットワークモデルに基づく分析」。「第7章 フレームに基づく多義語の分析」には「フレームとは」「フレームと現象素」「フレームとメトニミー」「フレームに基づく多義語の分析」。「第8章 統合モデルに基づく多義語の分析」には「統合モデル」「タマゴ」再考」「かたい」の分析(その3)」「多義説の妥当性」。巻末には「参考文献」と「索引」を付す。(椎名渉子)

(2021年10月10日発行 大修館書店刊 A5判横組み 289頁 定価3,740円 ISBN 978-4-469-21387-4)

伊藤孝行編『近代日本語教科書語彙索引』

本書は、明治期から戦中期に出版された日本語教科書10種15冊の日本語本文を対象として編まれた語彙索引である。この時期の日本語教科書は日本語の歴史や教育史を明らかにするうえで重要な資料群であるにもかかわらず、資料としての認知度が低く、検索の難しい画像形式で公開される場合も多い。そうした現況に鑑み、編者は持続可能性のある資料化・資料の共有・活用をめざす。

本索引では、動詞・形容詞／イ形容詞・形容動詞／ナ形容詞・名詞・副詞、定形表現を50音順に立項してあり、見出し語数は約24,600を数える。(遠藤佳那子)

(2021年10月25日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 363頁 定価8,800円 ISBN 978-4-585-38002-3)

天野みどり・早瀬尚子編『構文と主観性』

本書は、言語学・英語学・日本語学の分野の垣根を越え構文を捉えようとする、通言語的な論文集である。「構文」に関心のある研究者が集い、2018年から進めてきた研究成果をまとめた書である。「構文」のもつ様々な側面を主観性とと言う観点から論じている。

本書の構成は次のとおりである。「第I部 主観性をめぐる研究の総論および概観」には、「第1章 総論——構文研究・(間)主観性研究の展開——(天野みどり・早瀬尚子)」「第2章 4種類の「主観」の用語法(小柳智一)」。「第II部 言語学・英語学分野」には、「第3章 間主観的から接統的へという変化——意味機能変遷のもう1つの方向性——(小野寺典子)」

「第4章 構文拡張と主観化の解釈について——英語史における the/my/Ø question is の考察に基づいて——(柴崎礼士郎)」「第5章 譲歩構文からの拡張(大橋 浩)」「第6章 フランス語の連結辞 *ceci dit, cela dit* と語用論化(渡邊淳也)」「第7章 後置型懸垂分詞構文について——*assuming* 節と(間)主観性——(早瀬尚子)」「第8章 中間構文を含む、英語における無標識可能表現のネットワーク(本多 啓)。「第Ⅲ部 日本語学分野」には、「第9章 日本語主題構文と主観性(益岡隆志)」「第10章 「て+みせる」の文法化(青木博史)」「第11章 感情形容詞の連用修飾——主観性を導く構文の機能——(井本 亮)」「第12章 逆接の意味と構文——逸脱的なノラ文・ノガ文の意味解釈を中心に——(天野みどり)」「第13章 「可能性判断」と「構文」(三宅知宏)。巻末に「執筆者紹介」を付す。(椎名渉子)

(2021年10月26日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 293頁 定価3,730円 ISBN 978-4-87424-877-5)

影山太郎著『点と線の言語学 言語類型から見えた日本語の本質』

本書は、〈点〉と〈線〉という観点から英語や他言語と日本語を対照しながら日本語の特質の総合的な解明をめざす書である。〈点〉と〈線〉は言い換えると〈個 (individual)〉と〈つながり (link)〉となり、これらの観点から見た違いが音声、語彙、文法、語構造、意味、表現法、対人関係など多方面から見られることを論ずる。ここでの指摘は、日本語学の研究成果にとどまらず、日本語および英語教育、翻訳、総合的な人間理解などの関連分野にも応用できるものである。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」「目次」に続き、「第1章 言語の中の〈点〉と〈線〉とは——日英語の対照研究を超えて——」、「第2章 言語文化と語用論の〈点〉と〈線〉——個を重視する英語とつながりを尊ぶ日本語——」、「第3章 アスペクト意味論の〈点〉と〈線〉——出来事の丸ごと把握と段階的把握——」、「第4章 構文論における〈点〉と〈線〉——結果重視の英語と過程重視の日本語——」、「第5章 動詞から右方向への〈線〉の展開——レキシコンと膠着的な述語連鎖の仕組み——」、「第6章 出来事の展開を〈線〉につなげる補助動詞群——動詞の文法化と意味の機能化——」、「第7章 動詞から左方向への〈線〉の展開——名詞+動詞型の複合動詞と軽動詞構文——」、「第8章 日本語の〈線的〉性質と叙述タイプ——事象叙述、属性叙述、身体感覚叙述——」。巻末に「引用文献」「項目索引」「言語索引」「著者略歴」を付す。(椎名渉子)

(2021年11月12日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 284頁 定価3,740円 ISBN 978-4-87424-875-1)

益岡隆志著『日本語文論要綱——叙述の類型の観点から——』

本書は文の形(構造)と意味の対応を考察する文論(sentence grammar)において、日本語の観察から示される課題をもとに、他言語と共有できる一般性の高い研究課題の提起をめざした書である。

本書の構成は次のとおりである。「序章」に続き、「第1部 属性叙述をめぐる」に

は、「第1章 属性叙述へのアプローチ」「第2章 領域設定と二重主語」「第3章 述語名詞におけるカテゴリー形成」「第4章 拡大名詞文としてのノダ文」。「第2部 事象叙述をめぐる」には「第1章 事象叙述へのアプローチ」「第2章 日本語の受動文とその言語類型的特点」「第3章 日本語の恩恵文—受益文を中心に—」「第4章 日本語の存在型アスペクト形式」。「第3部 主題と主語をめぐる」には「第1章 日本語の主題と主語」「第2章 主題構文と主観性」「第3章 主題構文としての名詞修飾節構文」「第4章 ガの多機能性」。「終章」のあと、「補説1 日本語叙述類型論の研究史」「補説2 日本語の主題と主語をめぐる研究史」「補説3 叙述の類型から見た文の意味階層構造」。巻末に「参照文献」「索引」「あとがき」を付す。(椎名渉子)

(2021年11月16日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 278頁 定価3,960円 ISBN 978-4-87424-880-5)

角岡賢一著『上方落語にみられる待遇表現』

本書は、商いの中心地である船場の待遇表現を対象に語用論的に分析した書である。方言学における待遇表現の西高東低説をもとにしながら、補助動詞や卑罵語を取り上げる。

本書の構成は次のとおりである。「端書き」と「凡例」に続き、「第一章 はじめに」「第二章 待遇表現」「第三章 尊敬語」「第四章 謙譲語」「第五章 尊大語」「第六章 卑罵語」「第七章 結び」。

巻末に「初出一覧」「参考文献」「索引」を付す。なお、本書は龍谷大学国際社会文化研究所の研究助成を受け同所の研究叢書として刊行された。(椎名渉子)

(2021年11月18日発行 くろしお出版刊 A5判縦組み 282頁 定価4,400円 ISBN 978-4-87424-881-2)